

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特例扱承認証第六二七号  
明治三十一年十月十日第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)  
平成十七年十月一日発行(第百八巻第十号)

# ホトトギス

十月号



## 俳句随想

〔二百八十七〕

汀子

俳句は短い詩である。その短い十七音から句評を引き出すのに時に間違つた解釈をしてしまうこともある。平成十六年五月号に載つた一行評について、それは間違つた解釈であると指摘頂き、詳細の書かれてあるパンフレットを頂いた。その句は「もみづりて投入堂を秘めし峨々」という句であつた。「峨々と立つ崖の上に昔死者を投げ入れた堂の辺りの見事な紅葉」と私は評を書いた。投入堂を私は知らなかつたので、作者に尋ねればよかつたのであるが、私は句評をする時、その一句から自分の解釈をするべきだと思つているので、投入堂が載っている本を探したが判らなかつた。パンフレットにはそこは修験者たちの行場として役行者が開いたとある。評を書いた時の記憶であるが、倒れた修験者の遺体を投げ入れたと言ふのを何かで読んだのがそれに結びついてしまつたのか。投入堂へ辿りつくところこそは浄土を思わせるとパンフレットにある。その時やはり作者に聞いて句評することも大切だと思つた。この句の作者は一年以上の間、鬱々と思われていたに違ひない。心からお詫び申し上げたい。投入堂とは鳥取県三朝町にある三徳山霊場の一番高い所にあつて国宝になつているそうである。

旬日記

汀子

平成十六年十月一日 悼 瀬在華果様  
信濃路の稜線はる か星流れ

雲間なる今宵居待の月とこそ

をさまりし風の狭庭に小鳥来る

十月三日 野分会  
わが禁酒いつまでつゞく温め酒

無花果にまでは及ばぬ風禍かな

十月三日 下萌旬会  
秋風のやうやくといふ帰国かな

銀杏を蔵す大樹を仰ぎけり

十月四日 ロイヤル俳優  
新鮮といひて菜虫の穴だらけ

朝の間の露寒消えてをりしこと

露寒の仕事の山を積むばかり

十月七日 清交社  
たちまちに木の実時雨を誘ふ風

肌寒を心外せし怪我と聞きてより

肌寒の着込みしままの午後となる

十月八日 工業倶楽部  
伽石も 旬碑も 秋野の一部分

十月九日 九州ホトトギス同人会  
鴨乱舞見たる記憶のダムに來し

台風を避けし旅路となりしこと

濃筆の描き進みたる秋の草

十月十日 九州ホトトギス同人会 第二旬会  
真夜の月まぼろしなるや朝の雨

台風の進路を問ふも旅心

虫の戸を閉ざしたるより旅寝かな

十月十日 九州ホトトギス俳句大会  
露寒と思ひはじめし旅の雨  
爽やかやドアの把手も有田焼

十月十一日 平戸の旬碑へ  
流星や音一つなき島の宿

鳥屋に夜長の星の増えはじむ

爽やかな一日を約す朝日かな

閨降りて旬碑にも伽の星流れ

十月十二日 大阪倶楽部  
滞在の短き宿や薄紅葉

地下室の展示守るべし秋出水

一泊を増やす旅程や島の秋

そぞろ寒仕事の山を置きて旅

十月十三日 綿葉倶楽部  
目隠しのフェンスに育ちたる椰子よ

被災地に椋鳥の時の失せしこと

旅のこと語るに灯下親しみて

旅疲れなきかに秋の灯に集ふ

十月十四日 西の虚子忌  
露寒といふ快晴のありにけり

秋冷や虚子に供せし日も遠く

十月十六日 中国ホトトギス同人会  
秋惜む心を乗せて出航す

秋の日の海面きらめく波頭

一時間半の航路の秋日焼

虚子塔の露踏みし靴又旅に

十月十七日 中国ホトトギス俳句大会  
小鳥来て借景の城つながらぬ

十月十九日 有恒倶楽部  
近づけば野菊の雨のこぼれけり

豊年といはれをりしに風禍かな

雨に濡れ案山子の瘦せて行きにけり

冬仕度しなから出来る旅仕度  
忘れぬしなから測してみても  
台風の今から予測してみても  
野菊晴より横川路となりにけり  
十月十九日 無名会  
秋晴の旅に 家居の雨 一日  
お隣の 小鳥の 声の つながりぬ  
庭つづき小鳥の 声の つながりぬ

秋晴といふ山のあり湖のあり

小鳥来て庭師の帰つて行きにけり

台風に予定の立てぬ旬日記

ともかくも準備して台風に処す

十月二十一日 クラブ合同  
台風禍 樺大樹に及びけり

一つだに 残さぬ風の銀杏より

十月二十三日 ホトトギス社吟行会  
富士見えぬときの心眼冷まじき

ともかくも都心高きに登りけり

十月二十六日 年尾忌  
地震の地に電話通じぬ冷まじき

忌心を抱きて 雨の 十三夜

十月二十七日 十三夜旬会  
十三夜雲の 去來を 樂しみて

あきらめし 書齋に 集ふ 月の 十三夜

新しき 菊花展 人出は 城に向ひたる

十月二十八日 きざらぎ会  
菊花として白の小菊の色選ぶ

通じたる 電話の 声の そぞろ寒

快晴の空被災地のそぞろ寒

二ユース又見つけてしまひたるそぞろ寒

不用意に出掛てしましことそぞろ寒

十月二十九日 時雨会  
地震いかに夜寒いとはれたまへとぞ

山風の通ふ道あり吊し柿

伝へ來よ 地震の 消息 色鳥に

秋耕も手つかぬ地震の地なるべし

被災地のフアックスを待つ秋灯下  
十月三十日 旬会と講演の会  
飛火野をよぎりて鹿の寄迎あり  
露寒き消息 東京ばかり届きけり  
十月三十一日 野分会  
無花果と分かれぬ料理ありにけり  
無花果の熟れ具合よき客のあり

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成十六年十月一日 伝統俳句協会茨城県支部会

馬肥ゆるほどにワインの樽置かれ  
冷やかにロマネコンティ売られをり  
白よりも赤爽やかなワイン蔵

十月四日 俊英句会

早世といふも生き方草紅葉

十月七日 蕉心会

朝寒に生れし句心なりしかな  
忙しさや仕事運動会句会  
秋日濃き方へ蕉像視線置き  
秋の川目線に高く船行けり

鳥渡り来る水嵩でありにけり  
形良き名もなき菌置かれけり

十月十四日 西の虚子忌

邂逅も別れも西の虚子忌はも

十月十五日 土筆会

肌寒の朝は富嶽の凜として  
稲雀比叡の空を眩しめり  
一枚の湖肌寒の風生めり  
初刷りの十回といふ重みあり

十月十六、十七日 中国ホトギス同人大会  
秋の海島近付いて遠退いて  
吉兆をもて一俳誌寿

水平線大秋晴に歪みたる  
秋の雲一つなく備後の空よ  
十月二十三日 ホトギス社吟行会  
秋天を擱む四十五階かな

秋風に向く取舵でありにけり  
炭の香も音もかそけく炉を開く  
十月二十五日 若水会  
椋鳥の森動かしてをりにけり

十月十九日 草木瓜会  
ばつた翔ぶ確と地球を踏みしめて  
世を隔て小諸虚子庵炉を開く  
十月二十六日 年尾忌  
秋天の零す忌日の涙とも

ばつた追ふ子には未来のありにけり  
草といふばつたの玉座ありにけり  
十月二十七日 目黒学園句会  
冷まじや日本列島揺さぶられ

薄紅葉比叡の忌日彩れり  
冷まじやバス停までの十五分  
薄紅葉して稜線の和らぎぬ  
菊の香の届く縁でありにけり

十月二十一日 登高会  
菊に着き菊に発ちたる出会かな  
其の上は知らず松茸山香る  
十月二十九日 時雨会

ビル街を押し上げてある秋の声  
秋耕に土驚いてをりにけり  
末枯を左右に虚子の墓前まで  
秋耕やプロ野球何時終りしか

十月二十一日 「田虹」創刊十周年記念出句  
十年は二ッ昔とや去年今年



# 雑詠句評（九月号より）

忠彦・静龍・青虎  
中正・保佳・千鶴子  
葉・芳子・美奇  
明倫・憲明・廣太郎

## 大牡丹散つて宇宙に一余白 西予 濱永宗一

咲いた牡丹はその豪華な華やかさから花の王といわれている。牡丹園の中に取り分け大切にされた大きな牡丹が咲き誇っている姿は人々の賞賛を独り占めしていたが、花もやがて崩れ散ると誰も素通りし問う人も疎らになった。

あらためて牡丹園に来て牡丹を見て回ると、散ってしまったて今ほもう見ることの出来ない大牡丹の花の位置に視線が行くのである。消えてしまった牡丹への愛着の念が、牡丹園の余白と感じて宇宙の余白と表現し、それがあたかも宇宙の一角が消えてしまったように感じ取った作者の言葉の感性である。（静龍）

見事に咲いた牡丹は誠に大きい。牡丹園の中などで一際大きな花が咲いていたのである。又牡丹は散り際も潔い。散ってしまった花ではあるが、作者はその大輪を眼裏にしつかりと焼き付けているのだろう。「宇宙に一余白」とは見事に季題の大きさを言い当てている。（廣太郎）（以下略）

## 矢車に遊びごころの風が来て 岡崎 富田征也

この句に出逢うまでは「矢車は吹いてくる風を逃がさず、音を上げて喜んでいるもの」とばかり思っていた。ところが、この句では遊びごころを持った風が、矢車を見付けて遊びにやって来るという、機嫌よく風に廻っている矢車の雰囲気、楽しく伝わってくる句である。（忠彦）

わざとそうのように作られているのかどうか判らないが、鯉幟の竿の上の「矢車」はからからと大きな音を立てて回る。昔はその音が近所に響いていたのを思い出す。風に着目した事によって何か風自身が楽しそうな笑い声をたてているような感じがする。明るく、楽しい句である。（廣太郎）

天地有情

才子選

山里の豊かな麦の秋見つゝ 福岡 松尾緑富

山内のかそけき水音雪の下 同

ふと八十二歳が怖く木瓜の花 熱海 嶋田一步

父母の亡きその後の祭遠のきし 同

コンクラীব未だ決らず鐘臚 東京 稲畑廣太郎

ベネデイク十六世に沸く弥生 同

紅梅をむらさきと見る夕かな 豊中 瀧 青佳

吾が心満ちて満たざる臚かな 同

八重桜八重に手抜のなかりけり 神戸 後藤比奈夫

花の鞠とはねんごろにねんごろに 同

被災地はまだ荒々し若葉雨 京都 安原 葉

朴散華地震に崩れし土の上に 同

夢の世に斯く我のあり明易し 樞原 稲岡 長

五月闇文目もわかず水ほとり 同

星を抱き月を放せる大桜 神戸 山田弘子

倒木は朽ちゆき葎若葉かな 同

椿落ちて象の小川の底に咲く 同

来世あらば蛞蝓よりは石がよく 同

卯月潮満ちくる音を立て初むる 東京 今井千鶴子

やがて月出でて照らさむ夜の卯浪 同

眠れば玉を解きたる芭蕉見ゆ 明石 中杉隆世

旗のごと玉を解きたる芭蕉かな 同

鎌倉の海に突きたる鯛といふ 東京 坊城としあつ

鉢巻きの魚屋もよし鯛も亦 同

乾坤に彩あり一花寒牡丹 福山 竹下陶子

コスモスの百万本の雨となる 同

住み古りし山居の日々の柿若葉 龍野 浅井青陽子

溪よりの若葉風あり摩耶詣 同

爛漫の花明りして泉岳寺 姫路 桑田青虎

浜離宮花菜明りの道となる 同

椿垣伝うてゆけば別の家 徳島 上崎暮潮

さへづりをふりかぶりぬるいのちかな 同

花散るや前世しきりになつかしき 熊本 岩岡中正

蚕豆の大きき鬼に食はずほど 同

吾の流儀葉味山盛り初鯉 熱海 嶋田摩耶子

更衣デパート一つ無き町に 同

# 天地有情句評

汀子

八重桜八重に手抜のなかりけり 神戸 後藤比奈夫

創造主によって作られた自然の草花の精緻に感動する作者。八重桜が本当に八重であるのに手抜かりがないとは見事。

朴散華地震に崩れし土の上に 京都 安原 葉

地震に崩れた大地に自然の朴の花が咲き終つて錆色の花卉を散らしている。この傷んだ大地を悼むかに朴が散華していると感じ取った作者。

夢の世に斯く我のあり明易し 樺原 稲岡 長

早々と夜が明ける夏の朝、夢か現かまどろみの中にある自分がこのようにあると見ている至福の時間である。

星を抱き月を放せる大桜 神戸 山田弘子

大桜の花の隙間から見える夜空はすでに月が西に傾いて星が花に抱かれたように見えている。昼間の桜とは違って月や星との存問である。

来世あらば蛞蝓よりは石がよく 神戸 長山あや

何とも言えない蛞蝓の姿、塩をかけると融けてしまう哀れな存在である。作者は来世があっても蛞蝓はなりたくないと願う。

山里の豊かな麦の秋見つゝ 福岡 松尾緑富

身近に山里の情景が見られる作者の暮らしぶりの中から、麦秋の頃の豊かな心持に誘われて行く様子が想像される。

ふと八十二歳が怖く木瓜の花 熱海 嶋田一歩

はつと気がついたら自分が八十二歳になっているのに驚いた。毎日のようにプールで泳ぎ、若々しい作者が年齢を知った時。

コンクラーベ未だ決らず鐘籠 東京 稲畑廣太郎

ヨハネ・パウロ二世ローマ法王の逝去の後の教皇様を選ぶ厳粛な会議の結果を待つ我等の気持を鐘籠という季節が語っている。

紅梅をむらさきと見る夕かな 豊中 滝 青佳

朝の紅梅、昼間の紅梅、そして夕影が降りて来た紅梅を紫と見る百の変化を捉えた作者の感性の妙。